

第4章 平地の鳥

人工構造物に適応して分布を広げるイワツバメ

House Martins *Delichon urbica dasypurus* adapting to artificial structures to expand their habitat.

1 はじめに

本篇では、第3章「山麓の鳥」で紹介をしているイワツバメ。

1951年（昭和26年）出版の『信濃の野鳥』では、「南アルプスの幕岩や尾勝谷の奥の岩場と中央アルプスの天狗岩で集団で繁殖」と記され、山麓で見られる鳥であったことがわかる。その後、1962年（昭和37年）に刊行された『上伊那郡誌自然篇』には、「山地の岩壁から標高3000mの山頂の岩壁に至るまですんでいるが、近年一部が里に下り、天竜川沿いのコンクリートの橋から、一部の土橋・木橋にまで営巣し、また辰野駅やバスの車庫等にも営巣している」と、分布が山麓から人里近くの平地にまで広がってきたことを伝えている。

現在では、中央アルプス標高2612mのホテル千畳敷に10番^{つがい}ほどが営巣を行っているが、多くは人里近くの平地で営巣、繁殖を行い、個体数も増加の傾向にある。平地で一般的に見られる鳥となった。



写真1 水田で巣材を採取するイワツバメ

2 人工構造物に適応するイワツバメ

イワツバメが分布を広げ、個体数を増やしてきた背景には、コンクリート建造物の増加と、それにイワツバメが適応してきたことが挙げられる。

イワツバメは、出入り口が一つの、天井がある壺^{つぼ}巣を造る。天然の岩場では、天井に利用できる場所は限られているが、人工構造物（特にコン



写真2 人工構造物を天井に利用した壺巣を集団で造る

クリート建造物) ならば天井に利用できる構造を持つ場所は多い。また、集団で営巣を行うため、多数の巣をかける場所が必要となる。人工建造物は、この条件を満たすものも多い。その結果、限られた山麓の岩場に営巣を行っていたイワツバメは、人里近くの平地で営巣を行うようになり、営巣場所に困らなくなったことから個体数、分布も増加したのと考えられる。

3 上伊那で見られるイワツバメの巣



写真3 コンクリート架橋下 壁面に造巣
左：古巣 右：使用巣（下の図2タイプ）



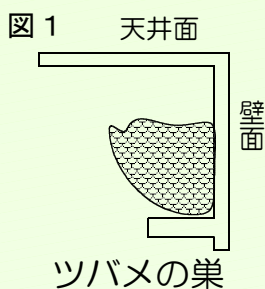
写真4 金属のコの字型空間を活かして造巣
中央自動車道 天竜川橋（下の図3のタイプ）



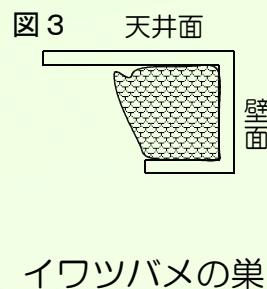
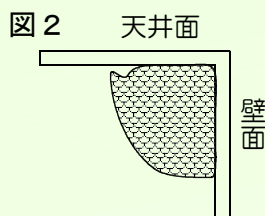
写真5 鉄骨とコンクリート面の間に造巣
天竜川 町田橋（下の図4のタイプ）



写真6 中央自動車道下 自動車用隧道に造巣

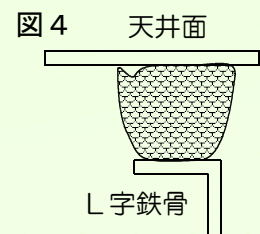


上部に空間がある皿巣



イワツバメの巣

人工建造物を利用して天井のある壺巣を造る



つぼす

次頁に示したように、上伊那では、天竜川やその支流にかけられた橋、中央自動車道下の隧道（トンネル）、コンクリートの建物にイワツバメの巣が多く見られる。

4 上伊那におけるイワツバメの営巣状況

